

## 令和2年度子どもの貧困対策についての検討ワーキング部会 報告

### 1 開催日時及び会場

- (1) 日時 令和2年9月25日(金) 午後3時～午後4時30分  
 (2) 会場 さいわいプラザ 6階 602会議室

### 2 出席者

児玉委員、山川委員、八木委員、小海委員、大屋委員、宮下委員、横澤委員  
 小池アドバイザー  
 生活支援課、学校教育課、子ども・子育て課 職員8名

### 3 会議内容

- (1) 子どもナビゲーターからの報告(資料1, 2)  
 (2) 「子どもの学力アップ応援事業」の実績等報告(資料3)  
 (3) アドバイザーからのまとめ



会議の様子

### 4 議事(1)～(3)に関する結果及び意見等については下記のとおり

#### (1) 子どもナビゲーターについて

委員：学校において、滞納等はしていないが、子どもによっては生活が心配なことがあるので、そのようなときに子どもナビゲーターが間に入り情報収集し、関係機関につながるということをされていると知った。もっと周知されることで、直接相談したいという保護者も多くなるのではないかと思う。

事務局：まだ直接保護者からの相談はなく、面談した保護者の方に、貧困についての相談に行った先を聞くと、大体の方が福祉窓口に行っているようだ。

委員：子どもの貧困は親の貧困なので、親の経済対策が大事だと思う。子どもナビゲーターが就学援助の校長受領委任を提案しても断るというケースが多くあるようだが、就学援助費は本来学校の費用に使うものでありながら、他に用途が決まっているので学校の費用を支払えないということもあると思う。そういう場面でも子どもナビゲーターに入ってもらい、生活保護担当等と連携するなど、横のつながりを広げていくことが求められるのではないか。

委員：以前のワーキングでも、本当に支援の必要な人はなかなか手を上げない、上げづらいという話があったので、アウトリーチしていく必要があると思う。

#### (2) 「子どもの学力アップ応援事業」の実績等報告

委員：以前いた学校で、経済的に困っており、学校を休みがちなお子さんのご家庭に他の学習支援制度を紹介したところ、それがきっかけで学業に身が入り、進学に結び付いたというお子さんがいた。せっかく素晴らしい制度があるのに通り過ぎてしまうのは残念であり、一人の子どもの人生がガラッと変わることもあるので、このような事業の案内は学級担任に伝え、確実に家庭に渡せるような連絡システムにしていきたいと思う。

委員：周りの家庭でも、親が教えられないけど塾は費用が高いという話をよく聞くが、このような事業の案内を子どもが親に出さないこともあるので、学校とも連携し、確実に家庭に届くようにしていただき、学力アップにつながればいいと感じた。

委員：学歴で門前払いを受けて人生の選択肢を狭められる子がいてはいけないし、貧困家庭の学力低下が統計で出ているので、ぜひこの事業は継続していただきたい。厚生労働省の学習支援と生活改善の二つの事業があると思うので、国の予算を使うなどして、家庭まで入ってお手伝いをするということにも力を入れてほしい。

### (3) アドバイザーからのお話

#### 【子どもナビゲーターについて】

- ・子どもへの支援については、貧困問題に限らず、人、物、機会を設置することでいろいろな課題が見えてくると感じており、長岡市では子どもナビゲーターを配置したことで見えてきているニーズがあると思う。
- ・高齢化社会の中で、子育て環境で起きている問題、課題は少数派なので簡単に他人事にできることであるため、見える形にしていけないと社会全体の中で認識してもらうことが難しい。
- ・子どもナビゲーターから、数値化した詳細なデータを提供いただき、長岡市でこういったことが起きているということ共有する機会が大事だと思う。
- ・家庭が学校と対等な関係を作ることは難しいと感じている中、そこに第三者が入ることの意味は大きいと思うが、それは学校側が子どもナビゲーターを受け入れてくださっているから成立すると思う。
- ・保育園が学校と大きく違うことは、ごはんを食べさせたり、体が汚れていたら洗ってあげることができ、貧困で生じている課題を自己解決できるという点である。学校ではきっちり支援につないでいくことが大事だが、保育園等では自己解決できる場所であるという場所の違いを認識していただければと思う。
- ・現在B判定（経過観察）の世帯は、今は大丈夫だが決して目を離していない家庭ではないはずだが、ナビゲーター一人でカバーできる件数ではないので、どういう風にカバーするかが今後の課題になってくると思う。

#### 【子どもの学力アップ応援事業について】

- ・子どもたちにとって、わからないことがわかるようになるとか、できないことができるようになるということは、子どもならではの喜び、楽しみ、自己肯定感であるので、自分も頑張ればできるということと一緒に喜んでくれる大人がいる場所や機会を求めていると感じているので、このような事業はありがたく、どのような形でやったとしても課題は生じると思うが引き続きやっていただきたい。
- ・このような事業は、ケースワーカーなどが丁寧にアプローチしても、発達に不安のある子、集団が苦手な子、初めての人が苦手な子など、どんなに呼びかけても出てこられない子どもたちがいるという現状がある。オンラインの事業も対象にすることを検討しているとのことだが、人の前に出る前のステップとしてオンライン活用もいいと思う。
- ・子どもが学ぶ権利というのは、子どもが持つ大事な権利であるので、100パーセント補えなくても、少しずつ補っていくような形ができるとよいと思う。